



Title	大正初期の少女雑誌『新少女』における西洋の女性の伝記
Author(s)	渡辺, 貴規子
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2025, 2, p. 95-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100804
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大正初期の少女雑誌『新少女』における 西洋の女性の伝記

渡辺 貴規子

キーワード

少女雑誌、少女文化、児童向けの伝記、大正期児童文学、西洋文化受容

1 はじめに

本稿で紹介するのは、大正初期の少女雑誌『新少女』（婦人之友社、1915年創刊）に掲載された西洋の女性の伝記についてである。『新少女』はジャーナリストの羽仁もと子（1873-1957）が1908年に創立した婦人之友社より1915年4月に創刊され、1919年12月まで発行されたと推定される¹⁾、月刊の少女雑誌である。この雑誌が当時の少女雑誌としては先進的な性格を持ち、興味深い研究対象であるのに反して、『新少女』に関しては、先行研究は非常に少なく、絵画部門主任の竹久夢二（1884-1934）の投稿画評やキリスト教との関係についての小嶋洋子の研究²⁾、そして『新少女』の第1巻から第3巻における西洋文化受容についての筆者自身の研究があるが³⁾、誌面全体に関して明らかにされてきたとは言い難い。それに加え、児童向けの伝記は、明治期より日本児童文学の中で大きな位置を占め、日本の子どもたちに読み継がれてきた重要なジャンルであるにもかかわらず、まとまった本格的な研

※大正時代の資料からの引用の際には、適宜旧字を新字に改め、ルビを省略した。また、合略仮名については分解して表記した。

- 1) 1919年12月発行の『婦人之友』の中で、「この一月号からは、今までの新少女を『まなびの友』と改めて、少年少女向きの新しい読物をつくることにいたしました」とあり、小学校低学年の男女向きの新しい雑誌が創刊されることが予告された。（「小学二三四程度程度の男の子女の子のための新絵雑誌『まなびの友』が出ました」『婦人之友』13巻12号、1919年12月、24-25頁。）
- 2) 小嶋洋子「竹久夢二と少女文化—『新少女』投稿画評と投稿画の変遷」『大正イマジュリィ』No.6、2010年、82-97頁。小嶋洋子「『新少女』における夢二と少女とキリスト教」『美学論究』26号、2011年3月、27-42頁。
- 3) 渡辺貴規子「大正期の少女雑誌『新少女』における西洋文化の受容—フランスに関する記事を中心に—」『言語文化の比較と交流 11』、2024年、45-60頁。

究は勝尾金弥による明治期から戦前までの少年向けの伝記研究があるばかりで⁴⁾、とりわけ、明治期から大正期の少女向けの伝記研究については、一つの雑誌やひとりの歴史的人物に焦点をあてた各論があるものの⁵⁾、まだまだ多くの研究があるとは言い難い。本稿では、これまで着目されなかった『新少女』に掲載された女性の伝記についてまずは紹介し、整理したい。そして、この少女雑誌が積極的に掲載した西洋の女性の伝記についての特徴を検討し、雑誌の編集方針や少女観との関係についても考察する。

本稿の構成は以下の通りである。第2章では、『新少女』の創刊者について、そして創刊までの経緯を整理しつつ、雑誌の編集方針を明らかにする。第3章では、『新少女』以前には、西洋の女性の伝記が日本でどのように出版されてきたかを簡潔にまとめる。第4章では『新少女』に掲載された伝記記事を紹介し、とりわけ単発で書かれた記事について説明を加える。第5章では、最も力を注いで書かれた伝記であると考えられる、羽仁もと子によるジャンヌ・ダルク伝について検討する。第6章では、2巻2号以降、最終号に至るまで連載された松本雲舟（1882-1948）の伝記物語について検討する。最後に第7章でまとめを付す。

2 『新少女』の少女観と編集方針

本章では、『新少女』の創刊までの経緯を整理し、『新少女』がどのような誌面を目指し、どのような少女像を求めたのかを検討したい。『新少女』創刊者の羽仁もと子は、1873年に八戸の旧士族の家に生まれ、教育熱心な環境下で育ち、東京の府立第一高等女学校を卒業後、明治女学校でも学んだ。明治女学校では、校長の巖本善治（1863-1942）に直訴して学費が免除され、『女学雑誌』（1885年創刊）の校正を担うことで寄宿料に当てて、働きながら修学した⁶⁾。宗教面では、第一高等女学校在学中に受洗し、終生プロテスタント信仰者であった。卒業後は盛岡で女学校教員となり最初の結婚をしたが離婚、1897年に再度単身上京して、報知新聞社に校正係として入社し、1899年に同社の記者となった。日本初的女性新聞記者であると言われ、いわゆる「職業婦人」の先駆的存在である。

1901年に同僚の羽仁吉一（1880-1955）と再婚して二人で報知新聞社を退社、2年後に夫妻で『家庭之友』を創刊し、同時期に、のちに教育評論家となる長女の羽仁説子（1903-1987）が誕生した。家庭生活の合理化を推奨したその雑誌を1908年には『婦人之友』と改称し、

4) 勝尾金弥『伝記児童文学のあゆみ—1891から1945年—』ミネルヴァ書房、1999年。

5) 小松聡子「『少年世界』に掲載された女性の伝記研究—『少女世界』と比較して」『国際児童文学館紀要』第24号、2011年、30-37頁。岸あゆり「一九〇〇年～一九二〇年代、読書の中の〈キュリー夫人〉—女子教育の文脈とメディアに注目して—」『早稲田大学国語教育研究』、38巻、2018年、50-60頁。渡辺貴規子「明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記—ヒロイン像の変容をめぐって—」『言語文化の比較と交流』9、2022年、1-10頁。

6) 斎藤道子『羽仁もと子—生涯と思想』ドメス出版、1988年、15-18頁。

同時に婦人之友社を設立、さらに7年後の1915年4月、編集長に詩人の河井醉茗（1874-1965）、絵画部門主任に竹久夢二を迎え、十代前半の女性を読者として想定した『新少女』を創刊した。折しも長女の説子が『新少女』の読者層の年齢に達しており、自らの娘が読むことも意識したと考えられる。『婦人之友』掲載の『新少女』創刊の予告では、従来の少女雑誌との差異が次のように強調された。

『新少女』を出すための欠くべからざる準備の一つとして、私共は過去一年の間、今の多くの少女雑誌に就て、精密なる注意を払ふことを怠りませんでした。さうして、その聞いてゐたよりも、思つてゐたよりも、より多く不健全、より多く不注意な読物に充されてゐることを知りました。商売敵といふやうな卑しい心持からでなく、その柔かな頭には、已に彼等の人生観の芽出しかけてゐる、多くの可憐な少女たちに、断然、あのやうな読物は不適当だ、と云ひたいまでに思ひます。露の玉のやうに清らかに、そよふく風にも動かさる、多感なる彼等のハートのために、私たちは出来得る限り奮闘したいので御座います。（『『新少女』の創刊』『婦人之友』9巻1号、1915年1月、14-15頁。）

少女雑誌は日本では明治30年代半ばに生まれたメディアであり、『新少女』以前にも複数の雑誌が存在したが、それら従来の少女雑誌は「そよふく風にも動かさる、多感」な少女たちが読むのには、「より多く不健全、より多く不注意な読物に満たされて」おり、「不適当」と強く非難される。それでは『新少女』はどのような誌面を目指したのであろうか。

少女の思想を、その好む所と、その見たり聞いたり思つたりしてゐる事柄を利用して、巧みに教へ導くのは、どうしたらよいであらうか。少女の感情の、ややもすれば、不健全なる多感に陥らうとする傾きのあるのを、どうして、落ち着いた、安んずる所のある、優しさ美しさに、導いてゆくことが出来るであらうか。少女の好みの、多くは非实际的に走らうとしてゐるのを、どうしたら、着実にして高尚なる趣味に移らせることが出来るであらうか。（『『新少女』初号出来』『婦人之友』9巻4号、1915年4月、14-15頁）

本当に少女の心持を了解して、どういふ場合にかれらは不健全な心持に浸つて行くのか、みだりにセンチメンタルになるか、どういふ風にその心持をつかつたら、健全に生き活きと、趣味と理性と二つながら有する人格の基礎をつくる事が出来るかといふことを、本当に考へて編集されたものでなければならぬといふのは、私共の何よりも熱心に考へてゐる所のことで御座います。科学的^{ママ}の記事や、实际的の知識や、衛生上の注意も、どうしたら、多くの少女が喜んで読んで、（…）我々の知らねばならぬ日常の知識を遺

憾なく備へさせることが出来るかと、考へて見ることは、また私共の大いなる努力に伴ふ、楽しみな方面で御座います。(『新少女』 第二号出来『婦人之友』 9 卷 5 号、1915 年 5 月、100-101 頁。)

引用では少女読者が、「不健全なる多感に陥らうとする傾き」や「みだりにセンチメンタルになる」ことに対する危惧が述べられている。『新少女』という雑誌を通し、彼女らの思考や好みが「非实际的」「多感」「センチメンタル」に傾くのを防ぎ、「落ち着いた、安んずる所のある」思考に教え導いていくこと、さらには「趣味と理性と二つながら有する人格の基礎」を培うことが目標とされた。また、少女読者を楽しませながら、科学的事実や日常的経験に基づく实际的な知識を伝えることも意識された。つまり、従来の少女雑誌は当時の少女読者たちに相応しくないという認識のもと、感傷的になりすぎない読み物と、科学的かつ实际的な事実に基づく知識の伝達により、少女たちの好みに寄り添いながら、「着実にして高尚なる趣味」へと教え導くことが目指されたのである。本稿で考察の対象とする女性の伝記の記事も、実在した人物の人生や歴史的事実に基づくという点で、この編集方針に沿ったものであったと言える。

さらに、『新少女』創刊号では編集者から読者への、「『新少女』はその進歩的なことに於て、その面白味の沢山なることに於て、真実に皆様の楽しみき友達の一人でありたいと思ひます⁷⁾」という言葉が見られ、編集者たちが雑誌を「進歩的」と捉えたことも判明する。それでは記事や言説の中に、どのような「進歩的」な少女雑誌としての特徴が見られるのであろうか。最も重要な点の一つと考えられるのは、たとえば以下の引用のように、読者が自分の頭で考え、自分で責任を持って主体的に行動すべきことが、繰り返し説かれた点である。

めいめいに子供の時から、よく気をつけて、自分のことは自分でするやうに、またよく考へて、自分の道は自分で歩む様にしなければなりません。大きくなつて、その行く道がだんだん混雑して来ても、幼い時から自分の道をよく考へて歩いて来た人は、まごつくことはありません。(羽仁もと子「新少女伝其の一 八百屋お七」『新少女』1 卷 1 号、1915 年 4 月、11 頁)

併し私は(…)父母のいひつけを守らう守らうとばかり思つてゐる少女を、上の上の少女だとは思つてゐません。といふのは私は少女といふものは、いつでも親や先生の仰有る通りにならなくてもよいものだと思つてゐるからで御座います。(…)人といふもの

7) 「雑司ヶ谷より」『新少女』1 卷 1 号、1915 年 4 月、119 頁。

は生れた時から、一生懸命に自分で自分を護り育てて行かなければならぬやうに出来てゐるのです。(…)あなた方の身体や心を、本当に護り、養ひ育てて行く人は、あなた方自身の外にはありません。(羽仁もと子「少女はどうしても親や先生の仰有る通りになければならぬものでせうか」『新少女』1巻9号、1915年12月、27-29頁)

一つ目に引用した「新少女伝其の一 八百屋お七」の記事は、創刊号の冒頭に掲載され、「自分のことは自分でするやうに、またよく考へて、自分の道は自分で歩む様にしなければなりません」という教訓はとくに読者に伝えるべき重要なものであったと思われる。

二つ目の引用の羽仁の論説でも、「いつでも親や先生の仰有る通りにならなくてもよい」と、時に親や教師の意見と自分の意見が違ったとしても、読者自身で考えて行動することの重要性が説かれ、「あなた方の身体や心を、本当に守り、養い育てていく人は、あなた方自身のほかにはありません」と、読者の心身の成長を支えるのはまずは読者自身であることが明確に述べられた。主体的に考え、行動する力の重要性については、羽仁は長女の説子にも家庭教育の中で繰り返し説いた。羽仁説子は、仕事を持つ母と過ごせる短い時間の中で、母との対話により⁸⁾、思考力が鍛えられたことに対する感謝を述べた。

そのころ世間は、「女の子だからおとなしく」しているようにとか、「女のくせに口答をするな」とか、女がものを考えることを、制限していました。そのなかで、母は、私に女の子という負目を少しもかけませんでした。したがって、ものを考える力に、私は何の制限をうけけることもなく、伸すことができたのをほんとうにありがたく感謝しています。(羽仁説子『私の受けた家庭教育』、婦人之友社、1963年、91-92頁。)

こうした方針は、『新少女』の編集部の中で、ひとり創刊者のみが取ったものではない。たとえば、『新少女』における竹久夢二の投稿画評の言説を分析した小嶋洋子によると、創刊当初は、投稿画の中でも素朴な細かい線を多用するスタイルが「いかにも少女らしいやさしい筆」などと評価され、「少女らしい」という言葉が肯定的に使用されたが、1巻8号(1915年11月)あたりから次第に変化が見られるという。つまり、投稿画の「真実性」や、少女

8) 羽仁説子は次のように母との対話を回想した。「私がいくらかものを整理して考えることができる とすれば、全く、職業婦人の子供としての私に恵まれた素晴らしい特権でした。母はまたそれを利用して、私の考え方を鍛えようとしてしました。私の幼い質問の弱点を見つけるとかかってきました。『あのね、あのね、が多すぎるよ。一度や二度は楽しいけれど、話が難しくなると、『あのね、母さん、あのね』ではかわいいけれどだめだ。落ち着いて、一番言いたい事は何か決めなさい』と言われてしまいます。まるで母と子の禅問答でした。」(羽仁説子『私の受けた家庭教育』、婦人之友社、1963年、91頁。)

たちが主体的な態度で対象を見つめ、描こうとすることが高く評価され、「単に感傷に溺れやすい弱々しい少女、ステレオタイプ化された少女ではなく、対象(…)をお仕着せの見方から脱し、主観でもって見つめ、解釈し、それを表現できる主体的な少女⁹⁾」となることが求められるようになる。読者が主体的に考え、その内容を表現し、実行することを雑誌の方針として推奨したと考えられるのである。

そしてまた、雑誌の「進歩的」な側面として、他誌と比較して西洋文化を積極的に紹介した点も重要である。この点について、筆者は以前別稿で論じたことがあるので、参照されたい¹⁰⁾。具体的には、まずはジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-1880)、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870)、エクトール・マロ (Hector Malot, 1830-1907) といった作家の、イギリスとフランスの小説の翻訳・翻案がほとんど毎号掲載された¹¹⁾。その目的は、たとえば、「サイラス物語」(『サイラス・マーナー』の翻案)の翻訳者が、「どうか気をつけて深く上手に読んで下さつて、あと二三回で、この訳を終つた時に、サイラス物語の面白味はどこにあつたかを、お互に投書欄で話し合つて見たいと思ひます¹²⁾」と述べたように、文豪の作品の読解を通し、少女読者たちの思考力、趣味、表現力を鍛えることにあった。そのほか、外国の日常生活における逸話、笑い話などを伝える記事、写真・絵画も頻繁に掲載され、読者は視覚的にも西洋文化に触れることができた。さらには理科(博物学)、家事、文化史関連の知識を伝える記事も見られ、内容は多岐にわたった。この点において、科学的事実や経験に裏打ちされた実際的な知識を読者に伝達しようとする雑誌の編集方針が西洋文化関連の記事にも表れている。そして、それらの西洋文化関連の記事の中でも女性たちの伝記は重要な位置を占め、『新少女』に掲載された被伝者の大半は西洋の女性の伝記であった。

3 『新少女』以前に出版された西洋の女性の伝記

本章では、『新少女』に掲載された伝記の特徴を考察する前に、『新少女』の創刊以前には、西洋の女性の伝記がどのように日本で出版されてきたのかを簡潔にまとめておきたい。日本における女性の伝記の形式と内容は、前漢(B.C.206-A.D.8)末期に中国で成立した劉向『列女伝』に多大な影響を受けたとされ、近世には、江戸幕府による支配の思想的根拠としての儒教の採用、識字の拡大による一般読者層の形成等を背景に、『列女伝』はより広い読者層

9) 小嶋洋子、前掲論文「竹久夢二と少女文化—『新少女』投稿画評と投稿画の変遷」、92-93頁。

10) 渡辺貴規子、前掲論文、「大正期の少女雑誌『新少女』における西洋文化の受容」。

11) まずジョージ・エリオット『サイラス・マーナー』(原題: *Silas Marner*, 1861)の翻案が創刊号から1巻6号にわたり掲載され、次にチャールズ・ディケンズ『ニコラス・ニクルビー』(原題: *Nicholas Nickleby*, 1838-1839)の翻案が1巻8号から2巻12号の14号にわたり掲載された。そののち、フランスの長編小説、エクトール・マロ『家なき娘』(原題: *En famille*, 1893)の翻案が3巻1号から3巻9号に「雛燕」のタイトルで連載された。

12) 田中久子「サイラス物語」『新少女』1巻1号、1915年4月、40頁。

に受容された¹³⁾。明治時代以降も、列女伝の形式を模した伝記集、すなわち、複数の模範的な女性の逸話や生涯についての記述が一冊にまとめられ、読者に道徳的教訓を与える伝記集が多数出版されたが、明治時代には日本や中国の模範的な女性に加え、西洋の女性たちについても語られるようになった。国会図書館編・所蔵『明治期婦人伝記文献集成』（マイクロフィッシュ版、全55巻、1994）には、明治時代に単行本として出版された228点の女性の伝記が収録され、筆者の調査では、収録作品の中で西洋の女性の伝記を含む文献は47点、そのうち列女伝形式の伝記集は白勢和一郎抄訳『泰西列女伝』（1876）以降23点が認められた¹⁴⁾。明治20年代にもなると、伝記の中で語られる西洋の女性は次第に増え、たとえば宮内省出版の『婦女鑑』（1887）の例話において紹介された女性の約半数は西洋の女性である。多くの西洋の女性の逸話や生涯が語られる中で、複数の伝記集に登場する、いわば定番化していった人物もいる。たとえば、賢母としての聖モニカ（Monica, 331-387（聖アウグスティヌスの母））、孝女としてのマーガレット・ローパー（Margaret Roper, 1505-1544（トマス・モアの娘））、為政者としてのスペイン（カスティーリャ）女王イザベル1世（Isabel I de Castilla, 1451-1504）、愛国者としてのジャンヌ・ダルク（Jeanne d'Arc, 1412?-1431）、慈善家としてのエリザベス・フライ（Elizabeth Fry, 1780-1845）、看護師としてのフロレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820-1910）、教育家としてのメアリー・リヨン（Mary Mason Lyon, 1797-1849）などである。

単行本の伝記集の出版に加え、1880年代半ば以降に次々に出版された婦人雑誌にも伝記は掲載された。平田由美によると、婦人雑誌の先駆けとなった『女学新誌』（1884年創刊）には、創刊号から女性の伝記が掲載され、その廃刊後に誕生した『女学雑誌』にも「内外列女伝」と題する欄に、古今東西の様々な女性の伝記が掲載された。中でも西洋の女性の伝記は、新時代に生きる女性に相応しい徳目のあり方が模索されつつ、近代における新たな女性像の創出に関わっていくものでもあった¹⁵⁾。

そして、本稿で考察の対象とする少女雑誌もまた、婦人雑誌の影響も受けつつ、女性の伝記を頻繁に掲載し、伝記を通してあるべき少女像を伝えた。『新少女』以前の少女雑誌に掲載された伝記研究は極めて少ないが、創刊号から3年にかけて『少女世界』（1906年創刊）に掲載された41作品の伝記を分析した小松聡子によれば¹⁶⁾、当時の『少女世界』では、少女読者に伝えたい徳目にふさわしいモデルが選ばれ、その徳目を語り手がメッセージとして

13) 平田由美「『列女』から『烈女』へ—近代日本の伝記における女性表象—」『タイ国日本研究国際シンポジウム2010論文報告書』、2010年、151-152頁。

14) 残りの24点は、ひとりの女性に対象を絞って書かれた伝記で、ジャンヌ・ダルク、フロレンス・ナイチンゲール、イギリス女王ヴィクトリアなど、複数の伝記が出版された被伝者もいる。

15) 平田由美、前掲論文、154-167頁。

16) 小松聡子、前掲論文、30-37頁。

分かりやすく簡潔にまとめて伝えた伝記が多かったという。そして、徳目の選択基準の根本には良妻賢母主義があり、当時の社会が求める良妻賢母主義へ少女読者を導こうとする雑誌の編集方針が伝記にもよく表れていることが明らかにされている。それでは、『新少女』では、どのような伝記が掲載されたのであろうか。

4 『新少女』に掲載された西洋の女性の伝記

『新少女』は1915年4月から1919年12月まで発行されたと推定されるが、1918年および1919年発行の第4巻、第5巻については、一部現存が確認できない。筆者は1巻1号から3巻12号まで、および第4巻、第5巻の巻号の内、日本国内の資料館の所蔵が確認できたものについて¹⁷⁾、伝記の記事を確認し本稿末の表にリスト化した。なお、ここに自伝は含まないものとする¹⁸⁾。

『新少女』に掲載された伝記の記事は、大きく次の4種類に分けられる。まず、1巻2号から1巻6号にわたり連載された羽仁もと子の「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」である。次に編集長の河合醉茗が2巻1号から2巻3号に連載した、じゃがたらお春を題材とした伝記的小説作品「日本恋しや」である。第三に松本雲舟が2巻2号より雑誌の終刊まで継続的に連載した「世界歴史物語」(第2巻、第3巻)、「世界少女物語」(第4巻)、「世界歴史 少女の面影」(第5巻)と題された伝記物語の連載である。最後に、連載ではない単発での個別的な記事である。このうち、日本の女性について語られたものは、河合醉茗「日本恋しや」と¹⁹⁾、3巻9号の特集記事「明治年間に活動したる婦人の印象」のみであり、他は西洋の女性について書かれたものであった。本稿第3章で言及した『少女世界』に1906年から1908年までに掲載された41作品の伝記の内、西洋の女性を取扱ったものが12作品だったことと比較すると²⁰⁾、『新少女』掲載の西洋の女性の伝記の数は多く、占める割合も大きいと言える。

17) 具体的には日本近代文学館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、および熊本県菊陽町図書館少女雑誌の部屋が所蔵する『新少女』の巻号、1巻1号～3巻12号、4巻1号、4巻2号、4巻5号、4巻6号、5巻2号、5巻4号について調査を行った。

18) 自伝的な読み物としては与謝野晶子「私の生ひ立ち」(1巻1号～1巻9号連載、1915年4月～12月)、3巻3号「現代婦人立志談」(1917年3月)がある。前者は与謝野晶子が少女時代を回想した自伝で、後者は、与謝野晶子のほか、安井てつ(教育家)、河合道(教育家)、久野久(ピアニスト)、池田蕉園(画家)、吉岡弥生(医師、教育者)が、それぞれの修学時代、修行時代について回想した文章である。

19) 「日本恋しや」では、江戸時代初期の長崎でイタリア出身の父と日本人の母のもとに生まれ、十代半ばに幕府の鎖国政策によりジャカルタ(バタヴィア)に追放された、通称じゃがたらお春が題材とされている。ジャカルタから日本に送ったという「じゃがたら文」により知られ、「日本恋しや、ゆかしや、見たや」という一節が有名である。ただし、現代では「じゃがたら文」が別の者の創作であり、お春が日本に帰国したいという意志に反して帰れなかった不運な女性であるという従来のイメージとは、異なる人生を送ったのではないかという説もある。(白石広子『じゃがたらお春の消息』、勉誠出版、2001年)

20) 小松聡子、前掲論文、36-37頁。

このうち、より重要度が高いと思われる、羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」は本稿第5章で、松本雲舟の連載については本稿第6章で検討することにし、本章では単発での記事について説明を加えたい。単発での記事の多くは時事的な性格を帯び、出版当時存命中の人物について述べた場合が多い²¹⁾。たとえば、「父を信じて高空から飛んだ少女」（1巻5号）で取り上げられたタイニー・ブロードウィック（Georgia Ann “Tiny” Thompson Broadwick, 1893-1978）は、1913年6月21日に女性史上初の飛行機からのパラシュートジャンプに成功した人物であるが、その事実を知った執筆者が寄稿したものである²²⁾。「欧州戦乱に身を投じて独軍に銃殺されたるエデス・キャヴェル女史」（2巻9号）は、第一次世界大戦中に両陣営の兵士を救い、ベルギーから連合国軍側の兵士の脱出させるのを補助したために、ドイツ軍により1915年10月12日に銃殺刑となったイギリスの看護師イーデリス・キャヴェル（Edith Louisa Cavell, 1865-1915）についての記事である。彼女が大戦開始後、熟考の末に人命救助という「自分の使命を自覚し」ひとりベルギーへ渡った点、ドイツ軍に捕らえられ、銃殺刑が決まったのちも、「何事も神のお心と信じ」決定を受け入れた点も記述される点で、第5章で検討するジャンヌ・ダルクの伝記との共通点も見受けられる²³⁾。

また、3巻3号の「有名なる世界の婦人」では出版当時のヨーロッパで活躍する女性を写真付きで特集し、マリア・モンテッソーリ（Maria Montessori, 1870-1952）、エレン・ケイ（Ellen Karolina Sofia Key, 1849-1926）といった児童教育や児童の権利擁護に尽力した人物、マリー・キュリー（Marie Curie, 1867-1934）やヘレン・ケラー（Helen Keller, 1880-1968）といった学者、サラ・ベルナール（Sarah Bernhardt, 1844-1923）、ジェラルディン・ファーラー（Geraldine Farrar 1882-1967）といった女優・歌手も紹介された。興味深いのは、短い記述の中に彼女たちの業績とは別に、その積極的な性格を伝える記述が付された点である。たとえば、女優サラ・ベルナールについては、「彫刻も絵画も出来、銃猟もする、ボートも漕ぐ、釣もするが、一番好きなのはテニスです²⁴⁾」と日常生活の中でも活動的な女性であることが紹介された。

また、この記事において特筆すべき事柄は、ハンガー・ストライキなどの強力な方法で女

21) 例外は「西洋の文豪逸話」で、エリザベス・バレット・ブラウニング（Elizabeth Barrett Browning, 1806-1861）、ルイザ・メイ・オルコット（Louisa May Alcott, 1832-1888）、ジョージ・エリオット、ジョルジュ・サンド（George Sand, 1804-1876）といった19世紀に活躍した女性詩人、女性作家が紹介された。少女時代、娘時代についての短文が掲載されたもので、ジョルジュ・サンドについては自活のために男装をして町を闊歩する逞しい女性として紹介された。（無署名「西洋の文豪逸話」『新少女』3巻10号、1917年10月、14-15頁。）

22) 阪谷芳郎「父を信じて高空から飛んだ少女」『新少女』1巻5号、1915年8月、33-35頁。

23) 無署名「欧州戦乱に身を投じて独軍に銃殺されたるエデス・キャヴェル女史」『新少女』2巻9号、1916年9月、78-79頁。

24) 無署名「有名なる世界の婦人」『新少女』3巻3号、1917年3月、33頁。

性参政権運動を展開したイギリスの女性運動家であり、サフラジェットとも呼ばれた、エメリン・パンクハースト (Emmeline Pankhurst, 1858-1928) とクリスタベル・パンクハースト (Christabel Harriette Pankhurst, 1880-1958 年) の親子も紹介された点である。その活動を非難する風潮が日本でも見られた彼女たちについて²⁵⁾、大正初期に紹介した少女雑誌は、管見の限り『新少女』のみである。「英国の婦人参政権運動者として、世界にその名を轟かした婦人です (…) 母子とも非常な雄弁家で、主義の宣伝の為には万難を排して戦つてゐます」と、その活動は好意的に紹介された。『新少女』では、この他にも女性参政権運動家の紹介が見られ、本稿第6章で検討する、松本雲舟による連載では、奴隷制度廃止論者で、アメリカの女性参政権運動の先駆者でもある、エリザベス・スタントン (Elizabeth Cady Stanton, 1815-1902) や、禁酒運動家で女性参政権運動家でもあるフランシス・ウィラード (Frances Elizabeth Caroline Willard, 1839-1898) の紹介が見られる。

以上のように、個別的に掲載された記事の多くは、雑誌の出版時の1、2年前の出来事や当時存命中の人物の活躍を記し、また、時には彼女たちの日常的な振る舞いについても記すことで、彼女たちの人生、生活を少女読者たちに身近かつ現実的なものと感じさせたと考えられる。そしてここでは、母として、妻としての偉業を語られた女性はおらず、飛行家、看護師、教育者、女優など、多様な職業に従事する女性が称えられた。また、管見の限りでは、『新少女』では、日本や海外で展開される女性参政権運動や女性解放運動について直接的に言及した記事は見受けられないが、複数の女性参政権論者を伝記の形で紹介し、パンクハーストのように、日本でもその活動が非難された運動家さえ好意的に紹介した点からは、誌面として女性解放思想支持の傾向を持つと言えるのではないだろうか。

5 羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」(1915年)

本章では、『新少女』に掲載された伝記の中で、最も力を入れて書かれたと推測される羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」について検討する。各号6頁から9頁の分量で書かれたこの伝記は、創刊間もない『新少女』の目玉となる記事であり、毎号の挿し絵は竹久夢二が担当し²⁶⁾、掲載号にはフランスの絵本作家ブーテ＝ド＝モンヴェル (Louis-

25) 堀場清子によると、たとえば、1910年8月に新聞記者兼作家の長谷川如是が「六月十八日の女壮士 (サツフレジエツト) の大行列」を『東京朝日新聞』で報じたのをはじめ、日本の新聞でもサフラジェットの過激な行動がしばしば否定的な論調で語られた。(堀場清子『青鞥の時代―平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書、1988年、50-51頁。)

26) 竹久夢二が『新少女』の挿し絵を描く際にしばしば隣にいた羽仁説子は、「母のかいた少女のためのお話に、夢二さんがかいたジャン・ダルク。これをかくとき、夢二さんは、なんべんも熱心に書き直し、書き直ししました。そして、この話を自分は大好きだ。いままでかかれたジャン・ダルクのいろいろな顔があるが、やっぱり夢二のジャン・ダルクをかくことにしようと、例のひとりごととも、詩ともいえない文句をくりかえしながらいいました」と回想した。(羽仁説子、前掲書、185頁。)

Maurice Boutet de Monvel, 1850-1913) による口絵²⁷⁾、パリのジャンヌ・ダルクの銅像の写真も付された²⁸⁾。史実とされる事柄に概ね基づきつつ、歴史的背景も分かりやすく説明され、何よりジャンヌ・ダルクの心の動きが詳しく描かれた、読者を惹きつける読み物であった。

ジャンヌ・ダルクは明治時代初期から複数の列女伝形式の伝記集で言及されており、ジャンヌひとりに対象を絞って書かれた伝記も明治期のみで4点出版された²⁹⁾。ジャンヌ・ダルクはいわば、当時、被伝者として最も有名な西洋の女性のひとりであり、明治30年代以降には少女向けの読物の中でも頻繁に語られた。しかし、結論から述べるならば、羽仁は従来の少女向けの伝記とは、趣を異にするジャンヌ像を描き出した。

筆者は以前、明治30年代から明治末期の少女向けの読み物の中でのジャンヌ・ダルクの表象について論じ、その特徴として次の三つの特徴を挙げた³⁰⁾。第一にジャンヌの外見の美しさに関する具体的な記述が見られる点である。作品によって記述は異なるが、髪、肌、目鼻立ち、馬上の姿、立ち居振る舞いの気品までに至る具体的な描写が見られ、美しいヒロインとしてのジャンヌは少女読者たちにとって魅力的な存在となった。第二に弱さとの強さの併存が描かれた点である。弱さを克服して勇敢に戦う姿が提示されることでジャンヌのけなげさが表現され、ただ強い「女傑」のジャンヌ・ダルクよりも、弱さを克服して使命を果たす「かよわい少女」としてのジャンヌ・ダルクの方が少女読者にとって身近なものとなった。第三に家族との描写や「家の娘³¹⁾」としての側面が強調された点である。ジャンヌが「家の娘」としての役割を果たせないまま家族を捨てざるを得なかった悲しみ、その悲しみを克服しつつ使命を果たす姿が描かれた。こうした三点の特徴の中には、将来の良妻賢母として生きることを説く価値観と、戦士としての勇気ある愛国的な行動との両方を損なうことなく評価しようとする執筆者たちの態度が看取された。

『新少女』でのジャンヌ・ダルク像は、従来の少女向けの伝記の特徴も部分的には踏襲しつつも、ジャンヌがどう考え、行動したのかという点に焦点が当てられ、次の二点の特徴を

27) 仏人ブーテ・ドゥ・モンヴェル筆「ジャンダルクの出陣」『新少女』1巻2号、1915年5月、口絵。

28) 「ジャン・ダルクの銅像」『新少女』1巻6号、1915年9月、32頁。

29) 朝倉禾積編『自由の新花 仏国女傑如安実伝』（1886年）、ゼーネット・タッキー著 粟屋関一訳『回天偉蹟 仏国美談』（1887年）、勁林園主人『西洋傑婦伝第一編 ジャンダーク』（1901）、リギョール著、教学研鑽和仏協会訳『ジャンダーク』教学研鑽和仏協会（1910年）。

30) 渡辺貴規子、前掲論文「明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記」、1-10頁。

31) 「家の娘」という言葉は、明治時代中期以降の言説空間において、家庭内の役割を果たすことが求められた少女を表す概念として久米依子が下記の論文内で用いている。ここでの「家」は成員の相互の愛情で結ばれた近代の家族のイメージで語られる一方で、少女たちにとってはあくまで娘としての「つとめ」を果たすべき規範と義務の場所であるとされる。（Cf. 久米依子「少女小説—差異と規範の言説装置」、小森陽一ほか『メディア・表象・イデオロギー—明治三年代の文化研究』小沢書店、1997年、195-222頁、とりわけ196頁。）

持つ。第一に、ジャンヌは多くの場合ひとりで考え、決断し、行動する。第二に、従来の少女向けの伝記に比べ、ジャンヌの考えや行動に対する家族の影響は小さく、そして困難を乗り越える彼女の心を支えるのは家族や望郷の思いではなく、自らの信仰心である。

第一の点について、まずジャンヌが故郷のドンレミ村を出る決心をするまでの心の動きが書かれた箇所を見てみたい。

慈悲深い正直な、さうして男子も及ばぬほどの強さをその心の中に持つてゐた彼女は、国のことが心配でたまりませんでした。(…) しかも少女の恥かしさに、自分はさういふ思ひを持つてゐるといふことを、親にも友達にも話したことはありませんでした。(羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻2号、1915年5月、9頁。)

私は仏蘭西の幸福になることを祈つてゐた、併し見る影もない、この羊飼の小娘が、この国を幸福にするものだなどと、余りと云へば思ひもよらぬことである。何のこともない幻なのであらうと、強て思はうとしてゐました。しかもその後彼女は幾度か同じ天使の声を聞きました。月にたつに従つて、それが果して神よりの使命であるならば、自分はどんな苦しい目をして、その使命を果さねばならぬと思つて見るやうになりました。(…) ジャンヌはまたも「行つて太子を助けよ」といふ、天使の告げを聞いたので、意を決して、なつかしの故郷をすてて、独りでソツと家を出ました。(羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻2号、1915年5月、10-12頁。)

明治時代後半の少女向け読み物の伝記の中では、ジャンヌは神の声についても、従軍についても、まず父親、または両親に相談し、悩みを打ち明け、村を出る許可を得ようとした³²⁾。しかし、羽仁が描くジャンヌは、国に対する自分の思い、神の声を聴いた経験、そして故郷を出ることすらも家族にも誰にも相談をすることはない。さらに上記の二つ目の引用では、神の声を聴いた現象についてもそれが幻か現実かを自ら分析している。こうして考え抜いた先に、「故郷をすてて、独りでソツと」家を出たのだとされ、思考、決断、行動のすべてがジャンヌひとりでなされるのである。ジャンヌが自分と向き合い、自分の考えや状況を分析する姿は、ジャンヌが捕縛される直前の次のような場面にも見られる。

思へば自分は、ドムレミーの少女であつた頃から、久しい間明かに、自分の心に天の声を聞いてゐた。かくして自分は自分の使命を信じ、何をも恐れずにただこの使命を果し

32) 渡辺貴規子、前掲論文「明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記」、8頁。

たいと思つてからは、あらん限りの自分の智恵と、さうして力の及ばない事があると、いつも懐しの天使によつて、明かに天の力が添えられるのであつた。この頃の私はどうだらう、様々の思ひ煩ひに、気も心も疲れて仕舞つて、今はモウ神様は、自分に何を望み給ふのか、どうすることが御心やら、殆ど知ることが出来なくなつてゐるのだ。（羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻6号、1915年9月、12頁。）

この引用でも、「自分は」「私は」と自己を顧みるジャンヌが描かれている。こうした自己分析の場面は、明治時代末期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記の中にはあまり見受けられない。そして『新少女』においてジャンヌはその思慮深さゆえに、「オルレアンを解いた頃から、自分はモウ遠からず死ぬのだと覚悟してゐる³³⁾」たとすら書かれ、栄光の最中であつて、自らの死を予知し、運命を静かに受け入れる姿が描かれている。

このように、ジャンヌがひとりで考え、行動することに対し、羽仁は時に「父母にも告げず、たつた一人で愛する家を去るのですもの、どんなに多くの悲しみが、彼女の胸に充ち満ちてゐたのでせう³⁴⁾」などと共感し、同情を寄せた。しかしながら、羽仁の描くジャンヌが苦しい時に支えとするのは、父母でも家族でもなく、自らの信仰心であつた。

苦しいことの起る度に、神様は私に重い御用をおいひつけになり、ドムレミー村を出よと仰有つた、私の行く道を塞ぎ給ふ訳はない、私たちは出来る限りの智恵を出し勇気を出して、なほも及ばぬ場合があれば、屹度神様が助けて下さると、自分の堅い信仰で、皆を励まし奮い立たせるのでありました。（羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻3号、1915年6月、8頁。）

困難のある度に、ジャンは一層神に祈つて、何とかしてこの困難に打ち勝つて、命ぜられた大任をなし遂げねばならないと思ひました。さうしてその度に段々に勇気が加はつて参りました。幾度番兵や役人に追ひ歸されても、今度はかう云つたら、自分のことが分かつてくれるか、ああ云つたら取次いでくれるかと、いろいろに考へて、また幾度も行つて見るのでした。さうしてその度に、彼女の心は、著しく賢くなつて行くのでした。（羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻3号、1915年6月、7頁。）

このように、『新少女』におけるジャンヌは苦しい局面に立たされた時、神に祈ることで勇気を出し、その勇気の湧いた心で、「今度はかう云つたら、自分のことが分かつてくれるか、

33) 羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻6号、1915年9月、10頁。

34) 羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻3号、1915年6月、6頁。

ああ云つたら、取次いでくれるか」と考え、試行錯誤し、困難を乗り越えた。そして困難を乗り越えるたびに、彼女は賢く、勇敢に成長していくものとして描かれる。このようにジャンヌが自らの使命を信じ、信じたことを最後までやり遂げる姿が、読者も自らの人生において見習うべき姿勢であるとして次のように評価されている。

ジャンのやうに、国の安危を自分一人の肩に担つて立つやうなことは、普通の少女の境遇にはいと稀な場合であります。併し私たちには、皆めいめいになしたい、なさねばならぬと思ふことが、必ずいつもあるものです。若しもその望みが、ジャンのように清く正しい、さうしてその事が、まためいめいに是非必要なことであつたなら、ジャンのやうに緊張した心持で、神の助けを祈りつつ只管に努めたならば、必ず成し遂げられるに違ひないと思ひます。(羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻4号、1915年7月、11頁。)

「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」では、自らの信仰心に支えられ、自分で考え、行動し、成長して、自らの意志を成し遂げるジャンヌの姿が詳細に描かれた。羽仁の執筆したジャンヌ・ダルクの伝記からは、自分の心と向き合い、考え、反省し、分析すること、そして自らの信じることを実行に移し、成し遂げる意志の力に対する賞讃が見られる。

もちろん、明治時代末期の少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記においてもジャンヌの悲しみや心の動きは描かれた。しかし、上述したように、悲しみの原因は「家の娘」として家族に尽くせぬまま、家族や故郷と別離せねばならなかったことや、望郷の念にある傾向がある。それに対して『新少女』における伝記では、家族の影響は希薄であり、ジャンヌの心はあくまで彼女自身のものとして書かれている。このジャンヌ像に、羽仁自身の信仰心が反映されたことは明らかである。しかし信仰心の重要性と同時に、この伝記の中で描かれているのは、「家の娘」としてではなく、あくまでジャンヌがひとりの人間として、自ら考え、信念に基づいて行動を起こし、自分の道を切り開いた姿でもある。

本稿第2章で引用した、羽仁もと子が創刊号に執筆した「新少女伝其の一 八百屋のお七」では、「子供の時から、よく気をつけて、自分のことは自分でするやうに、またよく考へて、自分の道は自分で歩む様にしなければなりません」という教訓が付された。そしてその続きとして執筆された「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」では、その重要な教訓がジャンヌ・ダルクという実在の人物の生き方を示すことを通し、より強く表現されたと言えるのではないだろうか。

6 松本雲舟による伝記物語の連載（1916-1919）

『新少女』掲載の伝記について述べる上で、松本雲舟による伝記物語（「世界歴史物語」（第2巻、第3巻）、「世界少女物語」（第4巻）、「世界歴史 少女の面影」（第5巻））は欠かすことができない。2巻2号より5巻12号までの3年余りの間、ほとんど毎号に掲載された上に³⁵⁾、紹介される歴史上の女性の人物は毎回異なり、合計44名の人物が紹介された。初回のクレオパトラを除き、アメリカまたはヨーロッパに生きた女性たちの逸話を題材とし、毎回4頁の分量で、各女性の少女時代の話を中心に、被伝者の功績と人となりについて平易な読みやすい文体でまとめられた。松本雲舟は、1906年に早稲田大学文学部を卒業後、翌年にヘンリク・シェンキエヴィチ『クオ・ヴァディス』（Henryk Sienkiewicz, *Quo Vadis*, 1895）の初の邦訳『何処に往く』（1907-1908）を上梓し、彼の代表作となった。大学在学中に受洗し、終生プロテスタント信仰者でもあった松本は、1914年3月、五来素川（1875-1944）が主筆であった読売新聞社に入社、同年4月より、同紙がフランスの『フィガロ』紙を模して創設した「婦人附録」の担当となり、その編集顧問に羽仁吉一、編集主任に小橋三四子（1883-1922）が迎えられた。松本は小橋と交代で「婦人と時勢」欄を担当したが、この頃、『新少女』や『婦人之友』の執筆も開始された。1915年11月には、小橋を主幹、自らが編集主任となり女性の擁護を目的とした「婦人週報」を創刊し、東京女子商業学校に無給で教鞭をとることもしていた³⁶⁾。1920年には、日本女子高等学院（現・昭和女子大学）の創立メンバーにもなる。このように、松本雲舟は『新少女』への寄稿当時、新聞記者として、教育者として、女性の地位向上のために熱心に取り組んでいた。本章では、松本雲舟の執筆した伝記物語に関し、まずは被伝者の選択及び、被伝者の評価された点について述べ、次に物語の記述を引用しつつ、その言説の特徴を探りたい。

6-1 被伝者の選択と評価された点

本稿末の表では、松本雲舟の伝記物語の被伝者も示したが、ここでは筆者の調査に基づき、彼女たちの日本での知名度という点で、次の三つに分類する。第一に、本稿第3章で説明したような、明治時代の女性の伝記集・伝記に頻繁に登場し、すでに被伝者として定番となっていたと考えられる人物である。第二に、列女伝形式の伝記集に頻繁に登場することはないが、1冊から数冊の伝記集ではすでに日本で紹介され、それを参照し記述されたと考えられる人物である。第三に、管見の限りでは、それ以前の日本での紹介が見当たらず、松本の文

35) 筆者が入手できなかった『新少女』第4巻、第5巻の一部の巻号についても、松本雲舟の伝記物語の連載があったことが、次の文献により明らかになった。佐々木満子「松本雲舟」『近代文学研究叢書 第65巻』、昭和女子大学近代文化研究所、1991年、136-138頁。

36) 佐々木満子、前掲論文「松本雲舟」、120-127頁および156-161頁。

章が日本での初めての紹介となったと考えられる人物である。

筆者が確認できた 28 記事のうち、第一に分類されるのが 8 記事³⁷⁾、第二に分類されるのが 13 記事³⁸⁾、第三に分類されるのが 7 記事であった³⁹⁾。興味深いのは、定番となる人物も含みつつ、比較的知られていない、または新しく日本に紹介される人物も被伝者として多く選択された点である。そして、19 世紀後半以降に活躍した人物、雑誌刊行時に同時代的に活躍する人物も複数見受けられる。この点で、伝記物語においても、第 2 章で言及したような「進歩的」な誌面を目指そうとした姿勢が表れている。

また松本が参照した文献について、次の考察が可能である。第二に分類される内の二人の被伝者、つまり思想家のエルネスト・ルナン (Joseph Ernest Renan, 1823-1892) の姉であるアンリエット・ルナン (Henriette Renan, 1811-1861) と、詩人のモーリス・ド・ゲラン (Maurice de Guérin, 1810- 1839) の姉ウージェニー・ド・ゲラン (Eugénie de Guérin, 1805-1848) については、『新少女』以前に日本で刊行された書物の中では、アリス・コークラン『婦人の典型』(1914) にしか記述が見られないため⁴⁰⁾、『婦人の典型』は参考にされた可能性が高い。原著者のアリス・コークランはイギリスの児童文学者で、少女雑誌 *Girl's Realm* (1898 年創刊) の編集者としても知られる。この『婦人の典型』には、他にも松本が被伝者として選択した聖モニカ、マリー・キュリー、マーガレット・ローパー、カロライン・ハーシェル (Caroline Lucretia Herschel, 1750-1848)、ドロシー・ワーズワース (Dorothy Wordsworth, 1771-1855) に関する記述もある。そして、同じくコークランが原著者の西洞たみの訳編『婦人に及ぼせる偉人の感化』(1908) にも『新少女』に掲載される伝記の被伝者と重なりが見受けられる⁴¹⁾。このため、まったく新しく日本に紹介された女性たちについては、未邦訳のコークランの著作や *Girl's Realm* 誌から、影響を受けた可能性も否定できない。また、松本は青年時代から伝記や歴史書を複数執筆したため⁴²⁾、明治時代以降に刊行された西洋の女性の伝記集も多数読んだと考えられ、たとえば徳富蘆花『世界古今名婦鑑』

37) 聖モニカ (2 巻 3 号)、イギリス女王ヴィクトリア (2 巻 9 号)、グレース・ダーリング (2 巻 12 号)、ナイチンゲール (3 巻 3 号)、メアリー・リヨン (3 巻 4 号)、マーガレット・ローパー (3 巻 8 号)、スペイン女王イザベル 1 世 (3 巻 9 号)、シャルロット・コルデー (4 巻 2 号)

38) クレオパトラ (2 巻 2 号)、カロライン・ハーシェル (2 巻 9 号)、スウェーデン女王クリスティーナ (2 巻 5 号)、ドロシー・ワーズワース (3 巻 7 号)、フランシス・ウィラード (2 巻 8 号)、ジェーン・グレイ (3 巻 5 号)、ハリエット・ピーチャー・ストウ (3 巻 10 号)、マリー・キュリー (3 巻 12 号)、アンリエット・ルナン (4 巻 1 号)、ベアトリーチェ (4 巻 5 号)、ウージェニー・ド・ゲラン (4 巻 6 号)、マーガレット・ミッチェル (5 巻 4 号)

39) ドロシア・ディックス (2 巻 6 号)、アリス・エアース (2 巻 11 号)、ラシェル・フェリクス (3 巻 1 号)、エリザベス・スタントン (3 巻 6 号)、クララ・バートン (3 巻 7 号)、ジェーン・アダムス (3 巻 11 号)、シスター・ドーラ (5 巻 2 号)

40) アリス・コークラン 著、林静太 訳『婦人の典型』、警醒社書店、1914 年。

41) 西洞たみの 訳編『偉人に及ぼせる婦人の感化』内外出版協会、1908 年。

42) 佐々木満子、前掲論文「松本雲舟」、131-143 頁。

（1898）には『新少女』に掲載される伝記の被伝者と重なりが見受けられる⁴³⁾。

被伝者たちが評価された点については、筆者が確認した 28 作品では、母、娘、姉妹としての息子、父、兄弟に対する、家族としての献身が評価された物語が 6 点と最も多い。次に多いのが、女王や為政者の少女時代の物語が 5 点あり、次いで職業を持つ女性たちとして、看護師の物語が 4 点、社会運動家・社会事業者と科学者が 3 点ずつ、文学者が 2 点、教育者と女優が 1 点ずつ見受けられる。また、身を挺して人命を救助した女性について 2 点の作品があった。第 4 章で言及した単発の記事においては、母・娘・姉妹・妻としての献身を賞賛する記事はなかったが、松本雲舟の連載では一定数が認められる。また、職業を持つ女性の中でも、看護師、社会事業従事者、教育者の女性についての記事が多く、身を挺して人名を救助した少女の伝記も 2 点含まれる。したがって、家族や他者を世話し、教育し、尽くすことが出来る女性を賞賛する傾向にはある。しかしそれと同時に、本稿第 4 章でも言及したように、科学者、文学者、女優といった職業に就き、自己実現を果たした女性、そして、当時の少女雑誌としては珍しく、複数の女性参政権論者も紹介されている。したがって、被伝者たちが評価された点についても、従来の少女雑誌が持つ良妻賢母主義的な価値観も部分的には踏襲しつつ、新たな価値観も加えられたとすることができる。

6-2 伝記物語の記述

最後に、伝記物語の記述について示し、被伝者の評価された点について、具体的に見てみたい。『新少女』掲載の松本雲舟の伝記物語では、被伝者の幼い頃や少女時代が語られ、その経験がどのように大人になって影響したのかが物語の最後に示される場合が多い。

28 作品の中で最も多かった、母、娘、姉妹としての息子、父、兄弟に対する献身が評価された物語については、たとえば、エルネスト・ルナンの姉アンリエット・ルナンは、「弟を立派な人間するために、其の一生を捧げたアンリエットは清い美しい偉い女ではありませんか⁴⁴⁾」と、自分を犠牲にしても相手に尽くす健気な態度が評価された。そしてしばしば、その献身を他者に誇示することなく、謙虚な様子も併せて次のように評価された。

やがて兄のワーズワースは詩人として英国ばかりか、世界に名を知られるやうになりました。ドロシーはかねての希望通り兄に一身を献げて、台所の事から家の世話まで、全然自分で引き受けてやりました、兄さんの行く所には、影の形に添ふやうに常に妹のドロシーが居りました。「一つの靈魂を兄妹で分けたやうだね」と兄の友達が笑ひながら言ひました。「え、さうなの」とドロシーも笑つて、「でも、兄さんの配分は私よりも

43) 徳富蘆花『世界古今名婦鑑』、民友社、1898 年。

44) 松本雲舟「世界少女物語（一）弟に一生を捧げた清い心の姉さん」『新少女』4 巻 1 号、1918 年 1 月。

沢山よ。兄さんが、八分なら私は二分位のものよ」

(松本雲舟「世界歴史物語（九）一つの靈魂を分つた兄妹」『新少女』2巻10号、1916年10月、16頁。)

詩人ワーズワースの妹のような兄に尽くす女性としては、カロライン・ハーシェルも同様の書かれ方をしており、「兄さんを慕つて、忠実に其の手助けをする妹さんは、凡ての男から尊ばれる女と申さねばなりません⁴⁵⁾」と兄を助ける女性は男性に必要とされる女性であるとして、将来の妻・母としても相応しいという意味も含ませつつ評価がなされている。

また、看護師や社会事業家として賞賛された人物も、健気さや他者への思いやりが成人してから実を結び、成功したのであるとされ、たとえばナイチンゲールが子どもの頃に破れてしまった人形を「手当て」したエピソードが語られたのちに、「女の慈愛の結晶である世界の赤十字事業の起つたのは、此少女の人形と花と、犬の看護から始まつた⁴⁶⁾」と述べられた。看護師のクララ・バートン (Clarissa “Clara” Harlowe Barton, 1821-1912) は幼い頃、大けがをした兄を看病したので、「病人の看護からやさしいこまやかな情緒を養ふことが出来」、その経験により「他人の弱きを助けるバートンの精神は其の一生を貫きました」と、幼い頃の経験で培った精神を貫いたのであると書かれた⁴⁷⁾。精神病院の整備を推し進めた社会事業家で看護師のドロシア・ディックス (Dorothea Lynde Dix, 1802-1887) も「親切心の深い少女」「愛の天使」と評された。こうした表現からは、家族や他者への献身、「看護」という「女の慈愛」を表す行為を實踐できる女性は、賞賛に値するという価値観が見られる。

しかし一方で、自己実現を図り、夢を叶えた女性を評価する作品もある。たとえば、次の引用はルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott, 1832-1888) が幼いころに家庭が貧しく、自活を決意する場面である。

「私はだんだんと偉くなりますよ。何にも心配しないでよい。私はお父さんお母さん養うために、教へたり裁縫したり、働いたり、書いたりませう。死ぬまでには、必ずお金持ちになつて、名高い人になります。烏や、お前、見ておゐで。(…) ルイサはやがて成人になつて、沢山書物を作りましたが、その内に「小さい女」といふ小説が一番善く知られてゐます。烏に誓つたことが、真実になつて、ルイサは名高い婦人になりました。(松本雲舟「世界歴史物語（六）洗濯盥の女王さま」『新少女』2巻7号、1916年7月、16頁。)

45) 松本雲舟「世界歴史物語（三）仲の好い兄と妹」『新少女』2巻4号、1916年4月。

46) 松本雲舟「世界歴史物語（十三）人形と花と犬の看護から」『新少女』3巻3号、1917年3月。

47) 松本雲舟「世界歴史物語（十七）他人の弱きを助ける心」『新少女』3巻7号、1917年7月。

また、本稿第4章でも言及した、女性参政権運動家のエリザベス・スタントンは、兄と女性である自分との間に、父親からの評価について差があり、自分が「女の児である以上、どんなに男の児よりも成績が善くつても、お父さんを喜ばせることが出来⁴⁸⁾」ないと感じた経験が「男女同権といふ事が世の中に認められて、女も男と同じやうに国会議員になる事が出来るやうになれば、女と生れた事が決して嘆息すべき事でない⁴⁹⁾」との思いにつながり、女性参政権運動に一生を捧げたと書かれた。

このように松本雲舟の伝記物語では、家族を陰で支えた女性も、慈愛や健気さが実を結び、看護師や社会事業家として成功した女性も、自己実現を図り、夢を叶えた女性も、男女平等社会の実現を図ろうとした女性も、評価されたということが判明する。そしてやはり、松本雲舟の伝記物語が、自己実現を図り活躍した女性を評価した視点に、従来の少女雑誌と比較して『新少女』が「進歩的」であろうとした態度が看取できるのではないだろうか。

『新少女』のこれまでの少女雑誌との違いをよく表すのが、生涯結婚することなく国を統治したスウェーデン女王クリスティーナ（Kristina, 1626-1689）に関する記事である。「男のやうに育つた女王」と題された記事（2巻5号）では、彼女が幼少期から男性のやうに育てられ、豪胆で頼もしい女性に成長する様子が肯定的に書かれた。

王さまは王女クリスチナを全く男のやうにお仕込みになりました。衣物も男のやうなの着せて、教育も男のやうになさいました。「偉くなれよ、お父さまのやうに偉くなれよ」と小さい王女を抱きかかへては、其の頬に接吻をなさいました。(…「いや、かまはずに大砲を打つがよい。クリスチナは軍人の娘だから、大砲の音になれさせておかねばならぬ」と言はれました。そこで間もなく城の内にある沢山の大砲は一時に鳴り轟いて、雷さんが百も千も一緒に落ちて来るやうな恐ろしい音を立てました。すると小さなクリスチナは、「もつと打て、もつともつと」と手を叩いて喜ぶのでした。王さまはそれを見て「流石におれの娘だ。これでこそ私の跡をつげる」と大喜びをなさいました。(松本雲舟「男のやうに育つた女王」『新少女』2巻5号、36-38頁)

クリスティーナに対するこの評価は、従来の少女雑誌では一般的なものではない。まず、そもそも、クリスティーナを紹介した大正初期までの少女雑誌は少ないと考えられる。そして本稿第3章でも言及した、良妻賢母主義に則る編集方針を取った『少女世界』では、1907年にクリスティーナの伝記を掲載したが、そのなかで、『新少女』とは全く異なる評価を与えている。つまり、彼女を、「可愛気のない、癪癪持の、高慢の、意地の強い、一口に約め

48) 松本雲舟「世界歴史物語（十六）三歳児の魂百までも」『新少女』3巻6号、1917年6月。

49) 同上

ると、一生を女の身として、幸福に暮さうとするには、全く不似合な不適當な性質」の持ち主であり、「不幸な」女性であると、反面教師的に少女読者に紹介したのである⁵⁰⁾。松本雲舟の伝記物語の一部には、たしかに良妻賢母主義に則った視点で書かれた作品も存在する。しかし、オルコット、スタントン、クリスティーナを題材とした伝記物語の記述のように、従来の少女雑誌とは異質な記述も存在し、従来の少女雑誌の価値観に縛られず、女性の多様な生き方を評価しようとする視点が認められるのである。

7 まとめ

従来の少女雑誌とは一線を画しつつ、少女読者たちの好みに寄り添いながら、「着実にし高尚なる趣味」へと教え導くことが目指された『新少女』という雑誌の中で、実在した人物の人生に基づく伝記は、少女読者たちに自分の生き方や、日々の思考・行動について考えることを促すためにふさわしい読み物であったと考えられる。家庭生活の合理化を促し、自らも母・妻・ジャーナリストとして多忙な生活を送っていた、『新少女』創刊者の羽仁もと子は、本稿第2章で見たように、創刊号で自ら寄稿した記事「新少女伝其の一 八百屋お七」の中で付した「自分のことは自分でするやうに、またよく考へて、自分の道は自分で歩む様にしなければなりません」という教訓を他の記事でも繰り返した。そして、「新少女伝其の一 八百屋お七」の続きとして書かれた「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」では、その激動の短い生涯の中で、ジャンヌがひとりで考え、行動し、信念を貫いた姿についての記述を通し、その教訓がより説得力を持って表されていたと言える。

そして、松本雲舟による伝記物語の連載では、良妻賢母主義に則った視点で書かれた作品も存在する一方で、職業面での自己実現を図り達成した女性も、男女平等社会を実現しようとした運動家の生き方も、評価された。この点において、『新少女』に掲載された西洋の女性の伝記の言説は、良妻賢母主義にその言説を制限される傾向にあった従来の少女雑誌と一線を画し、「進歩的」であったと言える。また、この傾向は単発の記事でも顕著に表れており、とりわけ、3巻3号掲載の「有名なる世界の婦人」ではサフラジェットと呼ばれる女性参政権論者も好意的に紹介され、雑誌の女性解放思想支持の傾向を読者に感じ取らせる。

『新少女』の2巻12号には、「新しい女⁵¹⁾」という言葉に対するコラムが掲載されており、

50) 西村渚山「クリスチナ女王」『少女世界』2巻4号、1907年3月、44頁。

51) 「新しい女」は平塚らいてう(1886-1971)が1913年に『中央公論』誌上で「自分は新しい女である」と公言し、流行語となった言葉である。明治末期から大正期にかけて、良妻賢母主義批判の言説として、社会主義者による「良妻賢母」批判とともに「新しい女」の言説が現れ、実際に良妻賢母主義の抑圧を乗り越えて多分野の職業で活躍する女性たちが「新しい女」として新聞記事で伝えられてもいた(牟田和恵『戦略としての家族』、新曜社、1996年、119-120頁。社会主義者や「新しい女」の言説における良妻賢母主義批判、および良妻賢母主義擁護論については、深谷昌志の分析を参照した。(Cf. 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』、黎明書房、1966年、228-237、251-267頁。)

そこには次のように書かれた。

「新しい女」といふのは近頃の流行言葉ですから、皆さんの中には小耳にはさんでゐる方もあるでせう。流行言葉に余り深い意味のないもので、私などから見ると皆さんは凡て新しい少女です。いつの世にだって旧（ふる）い少女といふものはありません。（…）苟も人間として生きて行く以上は、凡てが新しい人間です。新しい人間でなくてはなりません。わざわざ「新しい女」と女にだけさういふのは、世間狭い人たちが面白半分の好奇心から出た流行の言葉で、永く「新しい女」などいふ言葉が行はれるとも思はれません。（「新しい女と言ふ語」『新少女』2巻12号、1916年12月、104-105頁。）

この引用では、その言葉が自我に目覚めた女性たちへの揶揄・批判を含むことに苦言が呈されるとともに、読者全員が「人間として生きていく」以上は「新しい人間」なのであり、「新しい少女」であると述べられている。『新少女』という雑誌はそのような「新しい少女」のための雑誌なのであり、掲載された多くの伝記は、家庭や社会における女性の、より多様な生き方を示し、またそれらの選択肢の中で「よく考へて、自分の道は自分で歩む様に」というメッセージを読者に届けるための読物でもあったのではないだろうか。

本稿では、紙幅の関係もあり、とくに松本雲舟の伝記物語の個々の作品の言説を詳細に見ることができず、また出典についてもさらに調査を行いたいと考えている。今後の課題としたい。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究）「明治後期から大正初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容」（課題番号 21K12971、令和3年度～6年度）の研究成果をまとめた一部である。

補遺：『新少女』に掲載の女性の伝記の記事一覧

巻号	発表年月	執筆者	記事名	被伝者
1-2	1915.5	羽仁もと子	新少女伝（其の二） ジャン・ダルク（一）	ジャンヌ・ダルク
1-3	1915.6	羽仁もと子	新少女伝（其の二） ジャン・ダルク（二）	ジャンヌ・ダルク
1-4	1915.7	羽仁もと子	新少女伝（其の二） ジャン・ダルク（三）	ジャンヌ・ダルク
1-5	1915.8	羽仁もと子	新少女伝（其の二） ジャン・ダルク（四）	ジャンヌ・ダルク
1-5	1915.8	男爵 阪谷芳郎	父を信じて高空から飛んだ少女	タイニー・ブロードウィック
1-6	1915.9	羽仁もと子	新少女伝（其の二） ジャン・ダルク（五）	ジャンヌ・ダルク
2-1	1916.1	河井醉茗	日本恋しや（一）	じゃがたらお春
2-2	1916.2	河井醉茗	日本恋しや（二）	じゃがたらお春
2-2	1916.2	松本雲舟	世界歴史物語（一） クレオパトラの死	クレオパトラ
2-3	1916.3	河井醉茗	日本恋しや（三）	じゃがたらお春
2-3	1916.3	松本雲舟	世界歴史物語（二） 賢母モニカ	聖モニカ
2-4	1916.4	松本雲舟	世界歴史物語（三） 仲の好い兄と妹	ウィリアム・ハーシェル / カロライン・ハーシェル
2-5	1916.5	松本雲舟	世界歴史物語（四） 男のやうに育った女王	クリスティーナ （スウェーデン女王）
2-6	1916.6	松本雲舟	世界歴史物語（五） 愛の天使といはれた少女	ドロシア・ディックス
2-7	1916.7	松本雲舟	世界歴史物語（六） 洗濯傭の女王さま	ルイザ・メイ・オルコット
2-8	1916.8	松本雲舟	世界歴史物語（七） 酒の神と戦つたおてんば娘	フランシス・ウィラード
2-9	1916.9	松本雲舟	世界歴史物語（八） 嘘の嫌ひなヴィクトリヤ女王	ヴィクトリア（イギリス女王）
2-9	1916.9	無署名	欧州戦乱に身を投じて独軍に銃殺されたるエデス・キャヴェル女史	イーディス・キャヴェル
2-10	1916.10	松本雲舟	世界歴史物語（九） 一つの靈魂を分つた兄妹	ドロシー・ワーズワース （詩人ワーズワースの妹）
2-11	1916.11	松本雲舟	世界歴史物語（十） 火中に身を投じて三児を救へる女中の真心	アリス・エーアス
2-12	1916.12	松本雲舟	世界歴史物語（十一） 難船を救へる灯台守の娘	グレース・ダーリング

3-1	1917.1	松本雲舟	世界歴史物語（十二） 名優となつた靴直師の娘	ラシェル・フェリクス
3-3	1917.3	松本雲舟	世界歴史物語（十三） 人形と花と犬の看護から	ナイチンゲール
3-3	1917.3	無署名	有名なる世界の夫人	出版当時存命の活躍する女性の紹介 マリア・モンテッソーリ、エレン・ケイ、エメリン・パンクハースト、クリスタベル・パンクハースト、マリー・キュリー、サラ・ベルナール、ジェラルディン・ファラー、ヘレン・ケラー
3-4	1917.4	松本雲舟	世界歴史物語（十四） 女子大学を初めて建てた少女	メアリー・メイソン・リヨン
3-5	1917.5	松本雲舟	世界歴史物語（十五） 断頭台の露と消えし美しき姫	ジェーン・グレイ
3-6	1917.6	松本雲舟	世界歴史物語（十六） 三歳児の魂百までも	エリザベス・スタントン
3-7	1917.7	松本雲舟	世界歴史物語（十七） 他人の弱さを助ける心	クララ・バートン
3-8	1917.8	松本雲舟	世界歴史物語（十八） お父さんのお乳はあまいのよ	トマス・モアと娘マーガレット・ローパー
3-9	1917.9	松本雲舟	世界歴史物語（十九） 女王の宝石から亜米利加発見	コロンブス / イザベル 1 世（カステイリヤ女王）
3-9	1917.9	阪正臣他	明治年間に活動したる婦人の印象	税所敦子、奥村五百子、樋口一葉、瓜生岩子
3-10	1917.10	無署名	西洋の文豪逸話	女性文学者の紹介 エリザベス・ブラウニング、ルイザ・メイ・オルコット、ジョージ・エリオット、ジョルジュ・サンド
3-10	1917.10	松本雲舟	世界歴史物語（二十） 奴隷を解放した女の筆の力	ハリエット・ビーチャー・ストウ
3-11	1917.11	松本雲舟	世界歴史物語（二十一） 『貧民の家』を造れる娘	ジェーン・アダムス
3-12	1917.12	松本雲舟	世界歴史物語（二十二） お父さんのお室の掃除からラヂウム発見	マリー・キュリー
4-1	1918.1	松本雲舟	世界少女物語（一） 弟に一生を捧げた潔い心の姉さん	アンリエット・ルナン（エルネスト・ルナンの姉）
4-2	1918.2	松本雲舟	世界少女物語（二） 大悪魔を退治して断頭台の露と消えし勇壮な少女	シャルロット・コルデー

4-5	1918.5	松本雲舟	世界少女物語（五） 大詩人の女神となれる美 しき少女	ベアトリーチェ（詩人ダンテ の恋人）
4-6	1918.6	松本雲舟	世界少女物語（六） 一つの面に光る二つの目	ウージェニー・ド・ゲラン （詩人モーリス・ド・ゲラン の姉）
5-2	1919.2	松本雲舟	世界歴史 少女の面影（二） 病める者に一生を捧げた 愛に満ちた少女	シスター・ドーラ
5-4	1919.4	松本雲舟	世界歴史 少女の面影（四） 独学で天文台長となつた 学問に熱心な少女	マーガレット・ミッチェル

この一覧表は、日本近代文学館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、および熊本県菊陽町図書館少女雑誌の部屋が所蔵する『新少女』の巻号に関する調査結果である。具体的な巻号としては、1915年4月～1919年4月に刊行された1巻1号～3巻12号、4巻1号、4巻2号、4巻5号、4巻6号、5巻2号、5巻4号について調査を行った。

Biographies of Western women
in early Taisho era girl's magazine *Shin Shojo* (*New Girl*)

Kimiko WATANABE

Girls' magazines from the late Meiji and Taisho periods typically present exemplary images of girls through the publication of biographies. The monthly girls' magazine *Shin Shojo* (*New Girl*), published from 1915 to 1919 by Fujin-no-Tomo-sha and founded by Motoko Hani (1873–1957), was a magazine that actively published biographies. This magazine actively introduced Western culture, and most biographies of women published in *Shin Shojo* were also those of Western women. This paper focuses on the biographies of women published in “*Shin Shojo*,” particularly those written by Motoko Hani and Unshu Matsumoto (1882–1948).

In Japan, biographies of Western women in the form of serials began to be published after the publication of “*Taisei retsujo den*” in 1876, and many lives and episodes of Western women were introduced until the end of the Meiji period. In “*Shin Shojo*,” Motoko Hani serialized Joan of Arc, who had been frequently introduced in Japan in the past, for five issues in 1915. In her other articles in *Shin Shojo*, Hani reiterated the lesson that readers should ponder for themselves. In the biography of Joan of Arc, Hani focused on the thought and actions of Joan, with scenes of Joan confronting and reflecting on her inner self.

From February 1916 onward, “*Sekai Rekishi Monogatari* (World History Stories)” by Unshu Matsumoto began to appear in serial form, where the life and episodes of a different woman in each issue were introduced. Some of them were well-known women who had been featured in numerous biographical collections by then, such as St. Monica, Margaret Roper, and Isabella I of Castile. Additionally, some women who were active in the late 19th century and likely to be unknown in Japan at the time were featured, for example, Dorothea Dix and Elizabeth Cady Stanton. Their devotion to their families as mothers, daughters, and sisters, as well as their devotion to others were typically portrayed. Additionally, their qualities and actions as virtuous persons, politicians, and social activists were presented.

This paper introduces and organizes these Western women biographies published in *Shin Shojo* and discusses their relationship with the view of girls presented in the magazine.